

2006
3.28
火曜日

南日本新聞 タリ

瀬尾 昭一郎 健康コラム 感うこと

第9回

当帰の花

夏のことだった。わが家の「当帰(とうき)」が腰ほどの高さになり、白い花が集まって、開いた傘のような姿をしてあたりを明るくしていた。生命の勢いを感じた。

当帰はセリ科の植物で、特有のブーンとした芳香を持つ。「漢方のニオイ」と言われる独特の香りの一つだ。葉は濃緑色で、セリの葉の似て三つに分かれている。虫が付きやすく、煙でいぶして駆虫する話を聞いたことがある。当帰は漢方薬でよく使われる生薬の一つだ。病人に与えると健康に帰る、「当(まさ)に帰(かえ)る」といういわれ

がある。日本産の当帰は優れた品質を誇るが、生産農家が少なくなったのが悩みの種である。

当帰を使った漢方薬に「当帰芍薬散(しゃくやくさん)」がある。六つの生薬から成り、せんじたり粉末にして服用する。古典には粉末をお酒で服用するよう指示がある。胃腸の負担を軽くし、吸収を高める効果がある。おもしろい方法だ。色白で比較的体力がなく、冷え症、貧血傾向の女性に主に用いられる。安全性の高い漢方薬の一つで、妊婦の体調を整えたり、安産の目的でも服用される。近年は認知症で用いられた報告もあった。

葉は食いつくされ、葉枝にさなぎがぶら下がった。新しがある。六つの生薬から成り、そつと虫かごに入れた。数日後の朝、キアゲハが元気にはばたいていた。当帰の香りが広がった。狭いかごではかわいそうと思い、大空へ放してやった。当帰の養分を食べた青虫が、元気になつて生まれ変わっていく生命のつながりに、小さな喜びを感じた。

